

文語日誌(平成二十五年五月八日)

SAINT FRANCOIS D'ASSISE(アッシジの聖フランチェスコ)(九二年十二月)
メシアン作曲。ザルツブルク音楽祭との共同制作なり。ベルギーのバリトン、ホセファンダム
の十八番にして、天使役のドーン・アップショーも好演す。午後六時より始まり、休憩時
間を入れて六時間の長きに互れば、稍長過ぎの印象あり。パルジファルと似たる雰圍氣之
あり。

UN BALLO IN MASCHERA(假面舞踏會)(九三年一月、二月)

再演。演出若干變更ありて、二重唱の箇所背景は船のみとなれり。リツカルド役オニー
ルは小さき身體なれど大きな聲、アメリカ役ベニヤチコヴァーはやや全盛期をば過ぎた
る印象。ウルリカ役のザレンバ、オスカル役の韓國人シンも健闘。

LEF SEI CONCITTESE D. HOFFMANN(ホフマン物語)(九三年二月)

再演。バステイーユ屈指の愉しき舞臺として強く記憶に残ること必定なり。前回公演より
も上出来にて、三人の女聲歌手皆高水準なり。オランピア役のエスポジトはナポリ出身の
新星、自在のコロラトウーラは見事にて舞臺姿もいと美し。ダブルキャストの韓國人ソプラ
ノのシミ・ジョーも注目すべき歌手なり。ジュリエッタ役はザンピエーリ、大歌手だけありて
廣きホール一杯に聲滿てり。アントニア役のスペインのソプラノ、マリア・バーヨは更に上を
行く素晴らしさにて、アデリーナ・パツティの再來かと思はするほど聲の威力壓倒的なり。
聴衆皆魅了せられざるなし。今後有名となること紛ふ方無き歌手なり。

BENVENUTO CELLINI(ベンヴェヌート・チェリーニ)(九三年三月)

ベルリオーズ作曲。主役の豪州出身のソプラノなど歌手陣稍弱し。

MANON LESCAUT(マノン・レスコー)(九三年三月)

再演。マノン役のマルタ島出身のミリアム・ガウチ、役柄に合ひ、演技力もありて、美しき
舞臺と見事に調和せり。

III OPERA COMIQUE(オペラ・コミック)

オペラ・コミックはサル・ファヴァールとも稱せらる。一八七五年には舊劇場にて「カルメン」
初演せらる。今の劇場は一八九八年に開場す。客席數千三百プラス立見席。

シーズン九〇・九一年

MANON(マノン)(九〇年六月、七月)

巴里に到着し最初に見たるオペラの、オペラコミックに於けるマスネー作曲「マノン」たりし
こと、何たる好運か。其の後の巴里のオペラへの興味を一層誘起せしめたり。當夜は満席
なりしかど、南佛より此のオペラを見る爲にのみ態々巴里に上京したる八十七歳の老人、
急遽來ること能はざりし奥様分の切符をば小生に融通して下されたり。かの老人曰く、
「マスネーはラムールの音楽なり」と。サンシュルピスの場面にては「マニフィーク」と呟き涙を

ば流す。主役マノン役はルーミア出身の飛ぶ鳥を落とす勢ひのレオンティーナ・ヴァドヴァなり。コトルバスを若くしたる如き風貌にて、巴里にては既に人気者なり。なほ、ダブルキヤストのマノンはボルドー出身にて、佛蘭西人歌手による佛蘭西語も亦格別の味はひあり。

LA VIE PARISIENNE(パリの生活)(九〇年十二月)

オツフェンバック作曲。音楽は愉しく聞き慣れたる旋律ふんだんに出て来り本場ものなることを實感せしむ。男聲歌手陣、ミュージカル系の頼り無き聲の歌手多き中、一人男爵役のガブリエル・バキエ氏のみは國際的名歌手にして貫祿は十二分、ライندگانの如く足を擧ぐる場面もありて大いに喝采を浴びたり。劇場を出づればイタリア通りの店々にはノエル(クリスマス)の飾付け甚だ美しかりき。

LES PECHERES DE PERLES(眞珠採り)(九一年一月)

ビゼー作曲。巴里にては非常に人気のある出し物なれば、辛うじて天井棧敷を確保することを得たり。主役ソプラノは韓國人のパクなり。聴きどころは言ふもさらなり、テノールとバリトンの二重唱なりき。ノルウェイ人とベルギー人の組合せ、悪しくは無し。

LA ROSE DE SAINT FLOUR & UNE DEMOISELLE EN LOTT

ERIE(サンフルールの薔薇、寶籤の御嬢さん)(九一年七月)

オツフェンバック作曲。臺詞の半分近くは佛蘭西語なれば、言葉分らず興味は半減す。客少なく、歌手も魅力薄。されど休憩中にビスケットを配るサービス珍しく、籤引きにて客にフォアグラやワインを當てさすも微笑まし。

LE NEZ(鼻)(九一年十月)

シヨスタコーヴィチ作曲。モスクワ室内オペラの引越し公演なり。アンサンブルの良さ目立ち、ヴォツェックとやや似たるところあり。

RECITAL ANDERSON(アンダーソン)(九二年四月)

米國のコラトウーラ・ソプラノ、ジュン・アンダーソンのリサイタルなり。かなり若き頃より巴里にて活躍したれば、人氣は格別にて、天井棧敷の切符を漸く入手す。響き渡る心地良き聲なり。先づロッシーニ及びリストの歌曲。續きてロッシーニの「セミラーミデ」よりのアリア。八六年にロンドンのコヴェントガーデンにて「セミラーミデ」終演後にサインを貰ひたること懐かしく思ひ出づ。休憩後は、ドビュッシー、トゥリーナの歌曲。バーンスタインの「キヤンデイド」よりのアリア、母國語(英語)といふことも之有り、聲の表情豊かにして、此の演奏會白眉の出来榮えなりき。アンコールは、①プッチーニ「ロンディーネ」より、②庭の千草。彼女、テクニックは完璧、見榮えも良く、正しく今全盛期にあるプリマドンナとこそいふべけれ。

シーズン九二・九三年

ESCLARMONDDE(エスクラルモンド)(九二年十一月)

マスネー作曲。ワグナーの影響を強く受けたる作品にて、滅多に上演せらるることなし。歌ひ手には高度なるテクニックと立派なる聲をば要求せらる。日本にては全く見ること

能はざる作品と覺ゆれば、ダブルキャストを夫々二回づつ合計四度足を運びたり。新聞の批評、決して芳しきものにはあらざりしも、同じメンバーにて歐州各所を巡り來りたれば、アンサンブルには優れ、見れば見る程味はひのある演奏なり。主役のエスクラルモンドを歌ひし内の一人は、老齡指揮者ガヴァツエーニの夫人なり。見所は四幕の四重唱なり。また、父王の槍をもちて立てる姿、恰もヴォータンの如し。